

(九) 稲取・源為朝の旗 (院宣の旗)

稲取には、平安時代終わりに京都での戦いに敗れた源為朝の子孫が移り住んだという言い伝えがあります。保元元年(一一五六年)に、京都では天皇家、貴族の藤原氏、武士の源氏や平氏が入り乱れて戦った保元の乱という戦いがありました。この戦いで、為朝は崇徳上皇に味方をして戦いましたが、戦いに敗れて捕まり、罰として伊豆の大島に流されました。

その後、為朝は島の人に乱暴をしたり、伊豆の島々を奪ったりしました。このため、嘉応二年(一一七〇年)に為朝を討ち取るための兵が送られ、為朝はこの戦いで亡くなったとされていますが、琉球(沖縄)に逃げたなどの話も伝わっています。

この戦いの時に、為朝の子供の源為家は家来といっしょに島から逃げたといわれています。島から逃げてきた為家は、今の神奈川県

のあたりに住み、富岡の名前を名乗りました。その後、その子孫たちが稲取に住むようになったといわれています。また、この言い伝えとともに、源為朝が書いたとされる旗が稲取に伝わっています。

この旗は、「源為朝の旗」や「院宣の旗」などと呼ばれ、村木家に掛け軸にされて伝わっています。旗は、縦が約八十センチ、横は約二十六センチの大きさの絹の布に、真ん中に「崇徳天皇尊神」、右下に「為義」、左下に「為朝」と書かれています。為義とは、為朝のお父さんであり、保元の乱で為朝といっしょに戦いましたが、戦いに敗れた後に罰として殺されています。

江戸時代の寛政五年(一七九三年)に、老中(江戸幕府の将軍を助ける役職)を務めた松平定信が伊豆を見て回った時に、村木家に寄ってこの旗を見ています。このとき、松平定信は「この旗は大変めずらしいものなので、大切にするように。」と言っています。

また、お供^{とも}の人にこの旗を書き写させて、これを村木家に与えました。そして、「これからはこの旗は大切に、見に来た人には写したものを見せるように。」と言っています。

この旗については、源為朝が書いたものではないという説があります。これは旗の中央に書かれた「崇徳天皇尊神」の「崇徳」という号^{ごう}は、治承^{ちしょう}元年（一一七七年）に送られたものであり、為朝が書いたとすると年が合わないというものです。また、旗の大きさが当時の旗の大きさに合わないことや、旗を見た松平定信がめずらしい書や絵などをまとめた『集古^{しゅうこ}十種^{じっしゅ}』という本にこの旗を載^のせていないことなどからです。

しかし、この旗を為朝本人が書いたかどうかは別にして、稲取の歴史を語るうえでは、為朝の子孫が移り住んだという言い伝えを伝えていく必要があります。また、この旗が伝わっていることは、為朝の子孫などが稲取で為朝のことを語り継いでいこうとする思いが

あつたのかも知れません。

稲取には、いくつかの神社がありますが、そのなかで八幡^{はちまんじんじや}神社は稲取全体を守る神社とされています。八幡神社は、稲取を拓^{ひら}いた神様である穂都佐^{ほつさ}和氣^{わけ}命^{のみこと}と、源氏の守り神である誉田^{ほんだ}別命^{わけのみこと}がまつられています。この誉田別命^{ほんだわけのみこと}が祀^{まつ}られるようになったのは、為朝の子供の為家がかかわっているという言い伝えがあり、このことも源為朝・為家親子と稲取のかわりを伝えていきます。

